降臨節第1主日

2011/11/27

聖マルコ福音書第13章33節～37節
於：聖パウロ教会　司祭　山口千寿

先日、テレビで『水戸黄門』を見ておりましたら、徳川幕府の第5代将軍の綱吉が登場し、「余もようやく目が覚めた」と述べる台詞が出て参りました。今日の福音書に、「目を覚ましていなさい」というイエスさまのみ言葉が繰り返し出てくることを、既に読んでいましたので、この綱吉の台詞に敏感に反応することになったのだと思います。

この日の『水戸黄門』の物語は、綱吉が黄門に、自分のお膝元の江戸の都には将軍綱吉の威光が上から下まで行き届いているから、権力を笠に着て私腹を肥やすような悪い役人は一人もいない、江戸では世直しは必要ないと自慢をします。ところが、現実には、綱吉には忠義を尽くしているかのように装いながら、庶民の長屋を地上げして、そこに料亭を作って大儲けをしようと企む悪い旗本がいて、その悪巧みを黄門一行が暴き出すという筋書きです。将軍綱吉が町人に姿を変えてお忍びで町中に出かけ、悪事が露見する成り行きを見て、「ようやく目が覚めた」と述べることになるわけです。

この場合、目が覚めるということは、肉体的に眠っている状態から目が覚めるということではなくて、今まで気がつかなかったことに気がついた、自分の目には見えていなかったものが見えるようになった、ということです。今日の福音書のイエスさまの「目を覚ましていなさい」というみ言葉も、睡眠を取ることを禁じているわけではないと思います。そうではなくて、むしろ、再びイエスさまが来られるその時を見逃さないように、油断することなく待ち望んでいなさいと、弟子たちを励まそうとして仰っているのです。

目覚めて待つ、それがイエスさまの弟子たちが、この世を生きていく態度であることを教えておられるのです。見るべきものをきちんと見て生きるようにと、わたしたちの信仰の目が開かれ、大切なことを見ることを求めておられるのです。

さて、今日から教会の暦は、世の中の暦に先んじて新しい年となりました。その初めに、降臨節を過ごします。この期節を通して、わたしたちはみ子のご降誕を迎える備えを致します。今年は暦の関係で、25日の御降誕日が主日に当たりますので、降臨節の4つの主

日は、クリスマスを迎えるための心の準備に専念することができることは幸いです。み言葉を聞き、黙想し、祈りつつ備えて参りたいと思います。

降臨節のテーマは、救い主の到来とその来臨を待つことにあります。2000年前に幼子としてベツレヘムにお生まれになった神の独り子を、全ての人の救い主として、わたしたちも心の内にお迎えするのです。誕生物語の中に語られているメッセージを、今日のわたしたちにも告げられているみ言葉として聞き、神さまの救いのみ業がわたしたちのうちに成るように祈り、待ち望むのです。

同時に、救い主が再び来られ、救いのみ業が完成される終わりの時の到来を、喜びと希望の中で待つのが、降臨節に教会が守ろうとしているもう一つの事柄です。その二重の意味に於いて救い主が来られることを心に留めながら、信仰生活を送るのです。再び来られるイエスさまを、わたしたちがどのような姿勢で迎えたら良いか、それが、「目を覚ましていなさい」というイエスさまの勧めです。

何故、目を覚ましていなければならないのか。それは、イエスさまの来臨を、わたしたちは、それとは気付かないでやり過ごしてしまうからです。言い換えれば、イエスさまは、イエスさまがここに来ておられると、わたしたちには分からないような仕方でもって、お臨みくださるのです。

「いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである」と言われていますが(35節)、わたしたちが期待する時に、それに応えてイエスさまは来られるわけではないのです。わたしたちが困難な状態にあって、それを解決するために、今こそ救い主が必要だと願い祈り求めたとしても、その問題に、直接、答えを与えるような仕方でイエスさまとの出会いがあるわけでもありません。マルコは、そのことをよく分かっていたのだと思います。そこで、わたしたちがイエスさまと出会うのは、どのようにしてかを、今日の福音書に続くイエスさまの受難物語の中に、マルコは、それぞれの時をキーワドとして織り込んで描きました(『何かが起ころうとしている』)。

イエスさまは受難を前にして、12弟子と共に過越の食事を祝います。その席に向かう時刻が、「夕方になると」と、まず、はっきり指定されています(14:17)。その席で行なわれたことは何でしょうか。12弟子のうちの1人が、イエスさまを裏切ることになると予告されています。イスカリオテのユダです。

ユダは、何故、イエスさまを裏切ったのでしょうか。その理由は何であったのでしょうか。お金に目が眩んだためでしょうか。それとも、自分が描いていた救い主のイメージとイエスさまが進んでいこうとされた道が、180度違うことに気付いて、自分の考えを優先させることを選んだためでしょうか。

ここでは、人は、自分がそれまでに築いて来た考え方に基づいて自分の生きる道を選ぶのか。それともイエスさまのお示しくださる道に従って行こうとするのか、その分岐点に立たされるのです。わたしたちの日々の生活の中で、あれかこれかのいずれかを選択しなければならない状況に立たされる時に、そこでイエスさまに、お前はどちらを選ぶのかと問われることになるのです。

過越の食事が終わったあと、イエスさまと弟子たちは神さまを賛美する詩篇を歌いながら、ゲッセマネの園に向かいました。時刻は、おそらく夜遅くなってからでしょう。そこでイエスさまは、これからご自分の身に起こることを予感して、苦しみながら世を徹して祈り続けます。ペトロ、ヤコブ、ヨハネの3人に、近くに座って祈るよう求めます。しかし、弟子たちは眠気に勝つことが出来ず、イエスさまの求めに応じることができません。

わたしたちが自分の安逸をむさぼり、ほかの人の苦悩が目に入らず、世界の叫び声が耳に聞こえて来ない時、そのようなあり方に対して、イエスさまは「目を覚まして祈っていなさい」と言って、苦しみを共にすることを求められます。わたしたちが自分の関心を何処に向けたら良いか、その向かう先を転換させようと促されるのです。これは夜中の出来事です。

イエスさまが逮捕され、大祭司の館で裁判に付された時、ペトロはその様子を見るために屋敷の中庭にやって来ました。そして大祭司の女中から、「この人は、あの人たちの仲間です」としつこく指摘されました。それに対してペトロは、呪いの言葉さえ口にしながら、

再三にわたって女中の言葉を否定します。イエスさまとは何の関係もない、そんな人は知らないと言って、イエスさとの絆を断ち切ろうとするのです。その時に、鶏が2度目のなき声を上げました。

イエスさまを知らない、イエスさまなしで自分は生きていける、イエスさまなど必要としない。そのような思いをわたしたちが抱くとき、イエスさまは振り向いてわたしたちを見つめられるのです(ルカ22:61)。その眼差しはどのようなものでしょうか。何を語りかけようとしておられるのでしょうか。

イエスさまの裁判は、大祭司の館から、「世があけると」総督官邸へとところを移しながら続けられました。総督ピラトは慣例に従って、祭りのたび毎に囚人を一人釈放することを常としていました。群衆は、祭司長たちに煽動されて、バラバを釈放するよう要求します。ピラトが、「それではユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と問うと、群衆は、「十字架につけろ」と激しく叫ぶのです。死刑にせよと要求して止まないのです。

先日、一連のオウム事件の裁判の最後の被告に、最高裁で死刑の判決が下され、13人の死刑が確定しました。その報道の中で、オウムに殺された被害者の家族会の事務局長の方でしょうか、マスコミの取材に応じて、「麻原彰晃の死刑執行を、まず最初に行なって欲しい」 とコメントを述べていました。

被害者の家族であれば、それが自然の感情なのかもしれません。そのように思うことを、一概に非難することはできないかもしれません。同時に、他方、そのような思いを何のためらいもなくストレートに表白する姿に、ショックも受けました。そして、このような思いを抱くことは、決して他人事として済まされることではないとも思ったのです。

わたしたちの日常生活でも、密かに他人を抹殺したいという思いが忍び寄って来ることを否定することはできません。自分が何かをしようとしている時に、それに対して邪魔立てをするような人が現れる。それによって自分の企てていたことが上手くいかない。そんなことが起こります。そのような時に、あいつさえいなければ首尾よくいったのにと腹を立てることがあるのではないでしょうか。自分の思いを貫くために、他人を排除しようとする

ことなど、日常茶飯事のことではないでしょうか。排除するだけでは物足りず、抹殺しなければ気が収まらない。実際に手を下すようなことはないにしても、心の中では十字架につけろと叫んでいることは、しばしばあるのではないかと思います。

イエスさまは、わたしたちのそのような思いの故に、侮辱され、むち打たれ、十字架につけられたのです。誰かを「十字架につけろ」とわたしたちが心の中で叫ぶたびに、イエスさまの血は流されているのです。

「目を覚ましていなさい。」このみ言葉は、イエスさまが再び来られる時を見逃すことのないようにと、わたしたちの注意を喚起します。イエスさまは、「夕方にも、夜中にも、鶏の鳴くころにも、明け方にも、」毎日の生活の一瞬一瞬に、再びわたしたちのもとを訪れてくださいます。そのイエスさまに、わしたちの目が開かれて心の中に迎え入れることが、今を生きるわたしたちの信仰生活です。

話は変わりますが、昨日、降臨節前夕の礼拝がメサイアの中から何曲かを奉唱して捧げられました。皆さんと共に、聖パウロ教会の創立135周年を祝い記念して、素晴らしい祈りの時を持つことができたと感謝しています。

わたしは、この礼拝の中で読まれた聖書のみ言葉に心を打たれました。このみ言葉を、わたしたちの祈りの言葉として祈り続けなければならないと、心に深く留めました。

２人の盲人が、エリコからエルサレムに向かうイエスさまに、必死なって憐れみを乞うのです。イエスさまは、「何をしてほしいのか」と尋ねます。２人は、「主よ、目を開けていただきたいのです」と、自分たちの最も必要なことを願うのです（マタイ20:29～）。

この願いは、わたしたちの願いでなくて何でしょうか。見るべきものがきちんと見えるようになる。なくてはならないものに目が開かれて、それを見つめつつ生きることが、信仰生活の根本であること、改めて心の内に留めたいと思います。

「目を覚ましていなさい。」イエスさまに励まされながら、この降臨節を過ごして参りたいと思います。